探偵創作から国策宣伝へ
── 大庭武年と「満洲国」戯曲 ──

王　　占　一

キーワード：大庭武年、戯曲、「満洲国」、雑誌『満蒙』、満洲観

一、はじめに ── 戯曲作家としての大庭武年に注目する

1932年、「満洲国」が成立した後、満洲（現在の中国東北地方）における文芸界の「衰微」[1] が在満の日本知識人の間で問題視されていたが、次第に雑誌や新聞などが復刊・創刊され、総合雑誌の紙面における文芸欄も拡大していった。紀行文、詩歌及び翻訳作品を中心にする「満洲国」成立前の満洲文芸界の状況と比べてみると、様々な体裁の文学作品が書かれ、小説や戯曲も隆盛してきた。

雑誌『満蒙』の第143号（1932年３月発行）に群家陸夫の時評「寂寥たる満洲文芸界」が掲載されており、そこでは、「満洲郷土芸術のために一般文学青年の要望してゐるものは、自由たるそして権威ある発表機関への待望である。先づ近頃萎縮した観のある大連新聞文芸欄、さきに徹廃した満洲日報同欄の復活がそれである。之と共に小説、戯曲の発表機関も必要である」[2] と述べられている。こうして雑誌『満蒙』にも、小説、戯曲といった体裁の文学作品が要求されるようになった。「満洲国」が成立した翌月、『満蒙』の第144号に大庭武年の執筆した戯曲「張学良」（前半）が掲載され、その後、1932年から1935年にかけての三年間で大庭武年は７本の戯曲を創作し、そのすべてを雑誌『満蒙』誌上に発表した。

これらの戯曲によって、大庭武年は「満洲国」戯曲作家としての地位を確立したといえよう。この時代、戯曲は政策の宣伝手段としても大きな役割を果たしていた。当時発刊の雑誌や新聞の紙面には「支那劇」や戯曲に関する研究と創作が多く見られる。雑誌『満蒙』を開いてみれば、「満洲国」成立前の1920年代から、在満日本人が満洲の戯曲に興味を抱いていたことがわかる。その興味は当初、主に「支那劇」への研究と劇作の和訳を中心にして行われていた。そのなかでも、劇評家であった

辻聴花の「支那劇」研究と中国劇作家・田漢の劇作への和訳に特に眼が引かれる。辻聴花は「支那劇雑話」(1921年３月号）の連載をはじめに、「支那の南と北」(1922年６、７号)、「支那芝居いろいろ」(1924年１月号)、「支那芝居楽屋風呂」(1925年８月号）などの「支那劇」研究を『満蒙』に発表した。一方、劇作への和訳も行われ、田漢作・柳湘雨訳の「午飯之前」(「午昼の前」、1928年１月号）は代表的なものである。しかし、この時期においては戯曲研究や「支那劇」の和訳が多いとはいえ、新戯曲の創作はほとんど見当たらない。「満洲国」が成立した後、新戯曲、即ち「満洲国」戯曲の創作は政策宣伝の手段として現われ、なかでも大庭武年の戯曲創作は看過できない存在感を放っている。

これまで大庭武年は、探偵小説作家としてみなされることが多かった。西原和海の「大庭武年」論[3]と細川涼一の「大庭武年雑記 ── 旧満洲大連の探偵作家」[4] 等の先行する研究においては、主に大庭を「探偵作家」として論じており、戯曲創作への言及も散見されるものの、詳しく論じられていない。しかしながら、大庭が創作した戯曲は「満洲国」成立後、「満洲国」による政策宣伝の過程に戯曲が如何なる役割を果たしていたのか、を知るためにも価値がある。したがって本論では、1932年の「満洲国成立」を境に分割された大庭武年の前期の探偵小説創作と後期の戯曲創作を次節で繋げてまず考察し、つづけて第三節と第四節で「満洲国」時期に創作された戯曲を中心に、その創作の手法を検討する。

二、現実主義 ── 大庭の探偵小説と戯曲を繋げる

大庭武年は1904（明治37）年に静岡県浜松市に生まれ、二男三女の次男で、武年は本名である。７歳の時に材木商であった父大庭仙三郎が日露戦争後の建築ブームに乗り、満洲に渡った。父と共に渡満した大庭武年は大連の大広場小学校に転校し、そこで、彼は後に文筆家となる金丸精哉と知り合った。小学校を卒業した後、大庭は大連第一中学に進学した。同級生の中には後に小説家となる北村謙次郎（1904～1982）や詩人となる薊一郎（1904～1945）などがいた。在校中、大庭武年は北村、薊らを誘って文芸同人誌『アンジェラス』を刊行するなど、すでに文学を愛する少年であった。[5] 父の仕事のため、幼少年期を中国の大連で過ごしたが、中学校を卒業した後、大庭は早稲田大学第二高等学院文科に入学し、その後、早稲田大学文学

部英文科に進学した。そして1928年に卒業して間もなく、再び大連に戻って小説家を志し、文学の創作活動を始めた。

1930年10月、大庭の探偵小説「十三号室の殺人」が雑誌『新青年』の懸賞に入選し、彼は探偵小説作家として内地日本の東京文壇に登場した。その後、大庭は探偵小説家としての地位を確立することをめざし、雑誌『新青年』に「競馬会前夜」(1930)、「ポプラ荘の事件」(1931)、「牧師服の男」(1932)、「小盗児市場の殺人」(1933) などの短編探偵小説を発表した。これらの作品は「小盗児市場の殺人」を除き、すべて「満洲国成立」以前の創作であり、いわゆる大庭の前期創作にあたる。雑誌『新青年』に発表の機会を得て開始された短編探偵小説の創作は1932年の「満州国」成立以降少なくなり、1945年に戦死したことにともない、彼の存在は人々に忘れられた。戦後、大庭の探偵小説が再び評価されたのは1970年代のことであった。これについて細川涼一は以下のように指摘する。

> 忘れられた探偵作家であった大庭が戦後に再評価されるきっかけとなったのは、探偵雑誌『幻影城』が一九七七年五月に「大庭武年作品特集」を組み、大庭のデビュー作「十三号室の殺人」と「小盗児市場の殺人」の二編を再録したのほか、編集長島崎博氏による「大庭武年作品集について」と題する大庭の作品リストを掲げたことである。[6]

大庭の探偵小説のあらすじや創作経過は、上述した細川の論述及び横井司の解説[7] (2006年に出版された『大庭武年探偵小説選』の解説) で詳しく論じられているため、ここでは割愛する。本論で注目したいのは大庭の探偵小説に現われた非現実主義と現実主義が交差する創作の特徴である。探偵小説として虚構の非現実的要素が欠かせないことは言うまでもないが、大庭の作品の中には現実主義的な側面もある。大庭は小説の中で当時の大連市のことを“D市”、旅順市のことを“R市”のように表記しており、現実の場所を舞台にしていることを暗に示している。特に彼の郷警部シリーズの作品[8]に登場する警部は大連市警の警部のことである。探偵小説の最終作「小盗児市場の殺人」においても都市・大連の姿を描くと同時に当時の下層中国人の生活状況をリアルに描出している。

大連市は当時日本唯一の植民地都市であり、日本人や中国人のほか、ヨーロッパ

やアメリカから来た人々も多く、エキゾチックな街でもあった。また、当時の大連はモダン都市として発展しつつあった。西原は大庭の探偵小説創作とモダン都市の大連を繋げて以下のように指摘する。

> これらの作品群を通観してみると、私たちはそこに、彼の並々ならぬモダニズム趣向をうかがうことができる。一九三〇年代初頭の『新青年』と探偵小説とが有するモダニズムが、自分本来の感性によく共鳴することから、彼はまず取りあえずこのメディアと小説ジャンルを選び、試してみたのではなかったのか。（略）実生活の大庭は、その頃、大連きってのモダン・ボーイだったと伝えられている。大連が産んだモダニズム文学としては、安西冬衛たちの詩誌『亜』がよく知られているが、この都市のモダニティと文学の関わりを考察していくために、今後、大庭文学の読み直しが進められることを、多少とも期待したいところだ。[9]

大庭探偵小説の魅力は確かに西原に指摘された「モダニズム」である。しかし、その創作舞台としての大連が大庭の創作によってどのように表象されているのかを検討する必要があるだろう。柴紅梅は『小盗児市場の殺人』を例にして、大庭武年の探偵小説と都市・大連との関連性を分析している。

> 大連に暮らしているほとんどの日本作家は植民地としての大連の一面を退け大連の良さ、美しさしか描かない。このような描写は最も重要な植民地の問題を無視し、エキゾチックでモダンな都市としての大連の姿だけを見せ、日本の読者に大連を不正確に認識させるに違いない。大庭はこの点を認識して当時の大連の悲惨な一面もリアルに呈しており、私たちに植民地都市としての大連の真実を見せた。[10]

「満洲国」成立後、在満日本人は「王道楽土」、「五族協和」というスローガンを打ち出し、幸せな生活を迎えたと発言していたが、中国人、特に下層の中国人にとっては途方もない悪夢であった。『小盗児市場の殺人』のなかにも売春、犯罪、頽廃、苦悶などの場面が描かれているように、大庭は暗渠の中に暮らしていた中国人たち

の苦難を見ていた。大庭はこの中国人の「悪夢」を小説の中に書き入れ、客観的に大連の姿を示していたように思われる。少なくとも、探偵小説にリアルな要素を織り込むという現実主義的な傾向を持っていた。

1932年の「満洲国成立」にともない、政治に身を投じた大庭は文学活動を中止し、「満洲国」の建国運動に専念していた。それゆえ、1932年は創作の空白期にあたる。しかし、大庭の政治活動は失敗した。柴紅梅によれば、大庭が加わった笠木良一らの一派は総務庁と関東軍に対立しており、最終的には新政府に追い出されてしまったので、大庭の建国運動は全くの失敗であった。なぜ大庭が文学創作を中止し、政治に投身したのかについては、「モダニズム作家から満洲国官吏へと、大庭の跳躍的な転身ぶりには驚かされるし、こちらこそが真の謎だといえる」という西原の指摘のように、未解決の問題である。ただ、大庭は政治活動の失敗をきっかけに、自らが備えていた現実主義の要素を展開し、虚構的な探偵小説の創作から現実の要素を多くはらんだ戯曲創作に活動を移したということは可能かもしれない。大庭の探偵小説と戯曲の創作は現実主義という面で繋げ得るのである。「満洲国」成立の1932年を出発点に、大庭武年は雑誌『満蒙』を活動の拠点にして「張学良」、「満洲開基」、「劉愛護村長」などの戯曲を創作し、探偵小説の創作から国策宣伝を担うひとりの「知識人」へと変貌しつつあったのである。

大庭武年は「満洲国」が成立した翌月に発行された『満蒙』（第144号）に戯曲「張学良」（前半）を発表、その次号の第145号で「張学良」の後半も発表した。その後も、大庭は「烽火」（第155号）、「清朝終焉」（第158号）、「馬占山」（第159号）、「満洲開基」（第167号）、「蔣介石」（第169号）、「劉愛護村長」（第177号）などの戯曲の発表をつづける。またそれ以外にも、「凱歌あがる下に」（第147号）、「故国」（第153号）いう短編小説を二編、評論「満洲国に翹望する映画政策」を発表している。

三、個人的志向と「満洲国」の建国宣伝 ── 満鉄入社前の戯曲創作

「張学良」から「劉愛護村長」まで、大庭武年が戯曲を創作した時期によって、創作の背景と大庭自身の志向も変わっている。大庭が満鉄に入社していなかった時期は、国策宣伝の一面はあるものの、「通俗歴史叙述者」としての個人の志向が強

い。大庭自身は「今の僕としては強ひて通俗歴史叙述家としてより以外にして自分を生かそうとは考へてゐない」[11] と述べている。

大庭の戯曲は概ね1932年から1935年にかけておよそ三年間で執筆された。大庭は1934年に満鉄の鉄道総局愛路課へ入社したので、「劉愛護村長」を除いたほかの戯曲は満鉄に入る前に創作したものであると推測できる。大庭の満鉄入社に関しては、横井氏によれば、1932年に満洲国資政局弘報処員に「民間人」として起用され、1934年に奉天（現在の瀋陽）にあった鉄路総局愛路課長の引き立てにより愛護村課長として満鉄に入社したとされる。[12]「劉愛護村長」が満鉄の鉄道総局による愛路運動への宣伝に応じて創作されたものであることは言うまでもないが、創作時期から見れば、それ以外の戯曲は大庭が満洲国資政局弘報処員に「民間人」として起用された時期に創作されたものである。それでは、満洲国資政局弘報処とはいったいどのような存在なのか、また、大庭の創作にどのような影響を与えているのか。

いわゆる満洲国資政局弘報処は弘報処の前身であり、地方自治の指導と建国精神の宣伝を目的とし、リットン調査団対策や満洲国承認のための対日宣伝を行ったが、1932年７月に廃止になった。ただ、その後も広報は必要だとみなされており、対外広報のため外交部宣化司が設けられ、1933年４月には総務庁情報処が新設された。情報処は文書による対内宣伝工作や、治安維持会内の宣撫小委員会で幹事役を果たして討伐にともなう宣撫工作を推進した。1937年７月、総務庁強化の改革により情報処は弘報処として改組され、それまでの総務科、情報科に監理科を加えた三科体制となった。[13]

そのことを踏まえれば「満洲国」の初期は新政府機構の変動が大きく、「民間人」として採用された弘報員の大庭は体制から外れていたと推測できるだろう。したがって、この時期の大庭の戯曲創作は「弘報」からの影響は弱く、大庭自身の経験に根ざしていたり、私的な関心―たとえば、歴史に対する興味など―に基づいたりしていたと考えられる。この時期に創作した戯曲は主に三種類に分けられる。第一は歴史物、第二は政治における重要人物を描くもの、第三は物語である。大庭は「民間人」として採用されたとはいえ、弘報員として自作の中で「満洲国建国」を宣伝しなければならない。これらの戯曲の中に描かれた場面から国策宣伝に関わるいくつかの特徴を抽出し、分析してみよう。

（一）侵略性を「平和の為」に置き換える

「満洲事変」が日本人による侵略行為の起点であったと現在では思われているが、大庭は満洲事変の合理性をまず強調する。「満洲事変」を描く戯曲「張学良」は雑誌『満蒙』の第144、145号に掲載され、全部で四幕十二場であり、大庭の創作した戯曲の中では最も長いものである。この戯曲は当時満洲で発生した「張作霖爆殺事件」（1928.6）や張学良の「易幟」（1928.12）、「満洲事変」（1931.9）などの時局状況に基づいて創作され、張学良派と楊字霆派の内部闘争や「東支鉄道」をめぐる張学良とロシアとの論争などを描いている。作中には一人の日本軍人と張学良との対談が描かれ、この日本軍人は次のように発言した。

> 暴力を用ひるのはどちらだ。直接事件の口火を切つたのも、計画的に事件を孕ませたのも、一切汝等自身ではないか。支那の一致団結が汝等悪政治家の利欲的な団結である以上、天は永久に汝等と共にないだらう。又汝は我軍を軍国主義の侵略軍と称するが、笑止にすぎた世迷ひ言葉ではないか。我国がしばしば軍隊を動員させて、幾多の貴重な碧血と莫大な国幣を費したのは、いづれもたゞ平和を目的とするのみだった。（略）汝等は多年紛乱ばかりに終始して、毫も近代的紳士国の体をなさず、軍隊は武装した匪賊とかはらず、累を隣国日本に及ぼす事再々ではなかつた。日本生命線擁護の当然なる帰趨であり、又東洋平和の鍵を確実ならしめんとするに外ならないのだ。満洲に平和なくして東洋に平和はない、又満洲の平和なくして日支の真の親善はないのだ。[14]

日本軍人の言葉によれば、満洲に軍隊を動員させ、満洲事変を起こしたのは「平和を目的とするのみ」であったことになる。この「平和」の名義で帝国日本の侵略者の身分も平和擁護者と新国家擁護者とに置き換えられる。それと同時に、日中関係が侵略-反侵略という対立関係から友好関係までに変化させられ、日本による侵略性も不可視化される。日本が平和の擁護者と変身することに対して、張学良などの中国の反侵略者たちが逆に「平和破壊者」として扱われる。戯曲「張学良」は張学良という人物を「武力解決」の戦争主義者、または平和破壊者と見なしており、「忘恩の徒、私欲に汲々たるの汝等の一家は、調子にのつて我権益を蹂躙せんとし、暴戻な東北軍憲はあらゆる方面に於て非人道的な行為を敢行したのだ」と述べ、侵

略性を「平和の為」に置き換えることを通じて、ある程度日本の侵略者の身分をうやむやにしている。

（二）日中の対立関係を転嫁し、帝国日本を美化する

日本の侵略者の身分をうやむやにした後に、「満洲国」における日中の対立関係、特に中国人の日本に対する恨みを他方までに転嫁する。例えば、「張学良」には、張学良をロシアとの対立の中に置き、中露の対立関係を際立たせることを通して日中の対立を転嫁する傾向が見られる。東支鉄道の回収をめぐって描かれた張学良とロシアの労農国総領事メリニコフとの対談はその代表的な一例として挙げられる。

> （メリニコフ）ヂエネラル・張、私は私共政府が出来るだけの妥協的態度に出てゐるに不拘、あくまで貴政府が態度を改めにならないのを残念に思ひます。お察し致す所、続々として東支沿線に送達される支那軍隊は、武力を以て当該問題を解決なさらうとのご意思の表明だと思ひますが、しかし、我々は最後迄事を好み度くはなりません。今日ここに携へましたのは十箇條の平和解決策なのですが、出来ます事なら、これを貴国政府でご討議下さいません？
>
> （学良）頂いておきませう。だが念の為めにお訊ねしておきますが、これは最後的通諜と言ふのでせうね？
>
> （メリニコフ）如何にも、無論露国にも他国の暴力に対し露国民の合法的権利を擁護するに必要な十分な手段を有してゐる筈です。[15]

上記では東支鉄道の権益に関して中露の激しい衝突を描きながらも、日中の対立について触れていない。このような例は大庭の戯曲に多くみられる。例えば、「馬占山」に描かれた馬占山とフランスのジャーナリストとの対立、「清朝終焉」に言及した袁世凱の英露外交、「蔣介石」[16]に現われた中華民国と軍閥との対立などが挙げられる。多くの対立関係が書かれた一方、日中の対立が意図的に隠されている。これは、大庭が戯曲の中で設定した日中対立の転嫁である。この転嫁は内部への転嫁と外部への転嫁に分けられる。前者は、「満洲国」の内部に対立の原因をもとめるもので、満洲の人々の苦難と貧乏を「満洲国」成立前の軍閥間の戦争及び匪賊の猖獗に押し付け、「新国家」が軍閥や匪賊などを消滅させ、利益をもたらしたこと

を強調する。後者は、「満洲国」の外部に対立の原因をもとめ、ロシア、英米仏などの西洋国家に責任を転嫁するものである。

民族の対立を転嫁すると同時に、帝国日本を出来る限り美化する。例えば、「張学良」の中で一人の日本軍人が次のように言っている。

> 日本は満蒙に領土的野心があつて兵を動かしたのではない。総ては東北省悪政から、誘引されたのではないか。そもそも東洋の楽土満蒙は誰れの手によつてこれ程迄に建設されたか。支那人の力によつてか！アメリカ人、イギリス人の力によつてか！今更くどくどしく過去の歴史は茲にくりかへすまい。たゞ従来の日本がきはめて自由主義的な立場に立つてゐたればこそ、日本人のみならず満蒙居住支那三千万民衆の救済に外ならないのだ！[17]

「従来の日本がきはめて自由主義的な立場に立つてゐたればこそ、日本人のみならず満蒙居住支那三千万民衆の救済に外ならないのだ」という言い方からは帝国日本を「楽土満洲」の建設者と見なし、帝国日本を美化する大庭の意図が読み取れるのであろう。

（三）反日派を醜悪化する

大庭によって戯曲化された歴史人物・張学良、馬占山、蔣介石などは醜悪化される傾向にある。特に「馬占山」においては、大庭は馬占山を「満洲馬賊より大怪力の冒険家」、「満洲の大沼地で大蛇を素手でつかまへ、狼と格闘してこれを生擒つたと言ふ見世物的の人間」と描写している。「馬占山」は雑誌『満蒙』の159号に掲載され、フランスのパリを舞台にした三景のものである。1932年初夏、「悪戦苦闘を重ね、幾度か死地に陥ったが、その都度幸運に恵まれ、やうやくにして生命を全うしてヨーロツパにのがれる」[18] 馬占山が援助を求めるためにホテルで仮病を行ったが、誰も訪問してくれなかった。さらに、最後にはフランスの新聞記者に騙され、「ムツシュウ・マ・チャン・シアンは満洲の大沼地で大蛇を素手でつかまへ、狼と格闘してこれ生擒つたという見世物的な人間」として新聞に紹介されてしまう。馬占山はこの戯曲のなかで完全に醜悪化されている。大沼地で大蛇を素手で捕まえたり狼と格闘したりするイメージで描かれた馬占山はどう見ても正常な人間ではなく、

実に醜悪化された人物である。しかし、馬占山たちは次のように紹介している。

（林相文）皆さん、馬占山・将軍は支那の輿論を世界に訴へる人物です。馬占山・将軍はあらゆる満洲国の魔手をくぐつてたゞ世界に満洲問題に就ての真相を発表せんが為に生きのびて来られた方なのです。

（馬占山）思ふに東洋に於ける帝国主義日本の暴状は今や言葉に絶し、祖国への反逆者満洲国要人をそそのかし、三千万民衆を偽つて、我々の祖国「中華民国」を救ふべからざる窮地に陥入れんとしてゐる。[19]

馬占山たちの紹介と記者の描写を比較してみると、そのズレが明らかである。馬占山の自己紹介を認めず、故意に彼を醜悪化するという設定は東北救国抗日聯軍に蔑視の態度を取り、馬占山を醜悪化する大庭の意思を反映している。

「満洲国」が成立した後、馬占山は黒竜江省長とともに同年３月９日には満洲国軍政部長を兼ねた。しかし、その１ヶ月も経たない４月１日に黒河を密かに脱出し、ラジオを通じて東北全土に徹底抗戦を呼びかけて東北救国抗日連軍を組織した。こうしてゲリラ戦を展開したものの、軍事的劣勢を跳ね返すことはできず、1933年にはソ連へと脱出した。その後、ヨーロッパ経由で再び中国に入国した。馬占山は、馬賊時代の経験を生かした巧みなゲリラ戦術をもって知られ、日本軍将兵から「東洋のナポレオン」の異名を取った。[20] 大庭はこの時期の馬占山に基づいて醜悪化した馬占山像を作り出したといえるだろう。

（四）歴史から「中国」を取り除き、「満洲」のイデオロギーを創造する

帝国日本は中国の歴史及び当時の社会的な状況を詳しく考察し、侵略行為の合理性を作り出そうとした。1906年に設立された満鉄は一見すると鉄道経営の会社であるが、内実は帝国日本に情報を提供する機関であり、日本関東庁の指示の下で満洲地方の社会文化と歴史を全面的に調査していた。大庭が創作した戯曲はこの背景の下で雑誌『満蒙』に発表されたのである。そのなかでも、最も代表的な作品は第158号に掲載された「清朝終焉」と第167号に掲載された「満洲開基」の二本である。

「清朝終焉」は、大庭が1891年から1908年にかけての清朝末期の歴史に基づいて創作した四幕二場劇である。そこでは、袁世凱、李鴻章、張之洞などの北洋派[21]と

西太后（慈禧太后）、李蓮英、光緒帝、栄禄などの人物が続々と登場し、清朝の内部危機、すなわち、李鴻章などの北洋派と栄禄などの保守派との闘争を描いた。また、西太后、光緒帝、孝欽皇后をめぐる宮内の不和と腐敗、袁世凱の英日露外交、西太后の崩御などの場面も描いている。この戯曲は、「新しき民衆の時代は徒に溟濛な暗黒政治の雲を破つて輝き始めたやうです。古いものは滅びる、腐つたものは倒れる ── これは当然な事だと思います」[22] と書かれているように、清朝終焉の主な原因を清朝が時代に遅れていたとし、その点に求めているとまとめられる。

「満洲開基」は雑誌『満蒙』の第167号に掲載された、満洲発祥の伝説についての三幕劇である。戯曲開始の独白で「『満洲実録・巻一』を披見すると、我国の神話に類した満洲発祥の伝説が記されてゐる。もとより荒唐無稽な内容であるが、満洲国誕生の現在、考へてみるとたいへん浪漫的である」[23] と述べられているように、この作は「満洲国」の歴史的意義を求める創作だと考えられる。この戯曲は主人公の布庫哩雍順の誕生と成長、そして最後に「満洲」の国王になる過程を語っている。

この二作の史的な正確さについては、大庭自身も「必ずしも史的正確さを第一としなかった。劇の構成上、時間と空間を極端に圧搾し、人物も必要に応じて自由に取捨した。又史実も可成り単純化され、はぶき去つた所も一二に止まらない」[24] と述べているように、大庭は正史を追及するのではなく、歴史言説から見えた「満洲国」建国の合理性を求めている。この二本の戯曲では、「中国」の歴史が覆い隠され、満洲、或いは「満洲国」という存在に置き換えられている。たとえば、「満洲開基」の中の以下の対談が象徴的である。この対談からは「満洲国」の歴史を構築しようとする大庭の意図が見える。

（布庫哩雍順）最後の強敵も、たうたう滅びてしまつたのだな。これで全国は平定したのだ。

（兵一同）お目出度うございます。

（布庫哩雍順）うむ。しかし、この目出度いと言ふ事は、わしに言う言葉ではなく、今迄兵乱に苦しめられてゐる人民たちに言ふ言葉ぢゃ。わしは全部の国を引つくるめて、「満洲」と言ふ国を立てる事にしよう。わしが天意によつて国王だ。

（兵一同）国王は天の聖人、国号は「満洲」ぢゃ！

（布庫哩雍順）「満洲」はこれより以降、連綿として続き、人民は「満洲」を天下の楽土と謳歌するに違ひないのだ。「満洲」を享け継ぐ王たちよ、おみらは、我と同じく天より預けられたる神の御子であるぞ！

「国王は天の聖人、国号は「満洲」ぢゃ！」という語り方はそもそも歴史上に「満洲国」が存在すると言っているようなものである。つまり、ここでは「中国」の歴史を抹消し、「満洲国」の新しいイデオロギーを創造しようとしたと言えるだろう。

「満洲国」時代において、帝国日本は侵略行為を覆い隠すため、様々な文化手段を取って歴史事実を捻じ曲げ、新しいイデオロギーを作り上げて民衆の頭に注入しようとした。そうすることで満洲を植民地統治しようとしていた。その過程で文学、映画、戯曲などの芸術的な手段が使われている。帝国日本は満洲の民衆に対して思想を変えることを求め、イデオロギーで支配しようとしていた。そこにおいて最も重要な作業のひとつとして、「中国」という概念を取り除くことがある。

以上をまとめてみると、大庭は実際に戯曲創作を通して、「満洲国」の建国を宣伝し、様々な語り方によって「満洲国」の合理性を主張した。大庭は創作の中でなるべく自分の意図を織り込み、歴史と時局とに関わる多様な物語を書いた。それでは、満鉄入社後に創作された「劉愛護村長」に至っても大庭の個人的な考えは維持されていくのか。

四、完全な国策宣伝者となる ── 満鉄入社後の戯曲創作

1934年の満鉄入社後、鉄道保護という国策を宣伝する戯曲「劉愛護村長」が発表され、大庭の国策宣伝者としての姿勢が鮮明となった。「劉愛護村長」は、満鉄によって展開された「愛路運動」を背景に創作された作品である。

この戯曲が創作された時期はちょうど大庭が鉄道総局の愛路課に勤務していた時であり、鉄道保護という「満洲国」の国策を宣伝する意思が明確に提示されている。国策宣伝者としての大庭がいかに戯曲の中で満鉄の国策に迎合したのかを解明するには、これらの戯曲の背後における国策宣伝の創作特徴を検討しなければならない。政治的国策を文学作品に織り込むために、文学作品の中に「国策宣伝者」を設定す

るのは当時の「満洲国」の国策文学作家によく使われた手法である。[26] いわゆる国策宣伝者の役割は「満洲国」の民衆を啓蒙することである。これらの国策宣伝者は実際には「満洲国」という新政府の考えを代弁し、国策宣伝の要務を担っていた。当時の新政府は「鉄道は我々の生命線！鉄道は我々の責任！鉄道は我々の義務！」[27]という鉄道愛護を提唱し、人々に押し付けようとしていた。大庭の戯曲「劉愛護村長」の中に登場した劉村長はそのような国策宣伝者の代表的な一人である。大庭がなぜ戯曲の中に国策宣伝者を設定したのかについては、やはり彼の満鉄入社と関わっていく。

前述のように、大庭は1934年に「満鉄」に入社し、奉天にある鉄道総局愛路課に勤務するようになった。鉄道総局愛路課に奉職したのにともない、彼自身は大連から奉天に転居した。その時に大庭は『昭和十三年版　愛路運動の全貌』(1938.12)、『(愛路文芸集)』(1939.9) の 2 冊の著書を刊行したのである。最初に雑誌『満蒙』の第177号に掲載された「劉愛護村長」も『護れ愛路旗』の中に収録されている。したがって、戯曲「劉愛護村長」は「愛路運動」を背景にして創作された作品といえる。

愛路運動（全称「鉄道愛護運動」）とは「満洲国内に於ける鉄道を沿線住民者の力に依つて積極的に防衛愛護せしめようと云ふ工作のことである」[28]。愛路運動の主旨について、1939年に鉄道総局附業局愛路課によって編撰された『鉄道愛護運動の概要』の中では、以下のように述べられている。

> 元来鉄道は国家の生命線であり、例するならば人体に於ける血管である。若し此の血液の循環が停止したならば国家としても半身不随の状態に陥らざるを得ない事は言ふ迄もない。此の重大な鉄道の安全性を確保する事は鉄道従業員だけの力では到底不可能であり、軍隊や鉄道警護総隊又凡ゆる努力を傾倒してゐるが、満洲国内一万粁を保護監視する事はなかなかの難事である。故に沿線の住民に協力せしめ、各区域的に鉄道防護に任ぜしめて、運行の万全を期さうと言ふのが愛路運動の主旨である。[29]

「劉愛護村長」のあらすじは実に単純である。大辺溝愛護村長・劉万祥は鉄道を破壊しようとしていた杜景順、相文兄弟を見かけ、彼らに鉄道の重要さを伝え、景

順、相文兄弟のお母さんが重病になった時には防疫医を連れて来て、「鉄道線路の走つている村は、悪い病気でもあればすぐ斯うして医者様が病人を助けに来てくださるのだ」[30] とこの兄弟に「教育」し、最後、劉愛護村長が匪賊と戦う過程の中で犠牲になるという話である。ここから劉村長は国策宣伝者という身分で登場し、青少年を啓蒙・引導し、「鉄道保護」の国策を宣伝していることがわかる。劉村長はただの国策宣伝者ではなく、教師の役割も担っていた。実のところ、多くの「満洲国」戯曲の中に現われる国策宣伝者は、教育者がよく選ばれている。その理由は国策宣伝の説得力と信用度を高めるためである。これによって国策宣伝者は啓蒙者の立場に立ち、民衆全体に「教育」を行う。このように考えると、国策宣伝者の設定は、ある程度、帝国主義の支配的な視野がある。

そして「劉愛護村長」においては、景順、相文兄弟という存在に注意しなければならない。彼らは「満洲国」を担う次の世代として設定され、「満洲国」建設の主力軍と見なされている。実際にも、愛路運動において、若者は国策実施の行動者として位置づけられていた。上述した『鉄道愛護運動の概要』にも、この点について、「国家的社会運動の主対象が青少年層に向けられてゐると同じやうに愛路運動の工作も愛護団内青少年に主力を集中してゐる事は当然である」[31] との記述がある。「愛護村」にある青少年に関しては、孫佳茹は「日本占領下における満洲国愛路少年隊の役割」のなかで、次のようにまとめている。

> 愛護村の中で、主に11歳から18歳までの青少年を対象に、愛路少年隊という青少年組織を設立し、鉄道保護の役割を与えた上、「中堅層」育成という期待もかけていた。日中戦争が全面化する全年度1936年末の時点で、全満鉄道線路、延び１万キロに達し、愛護村の数が1270箇村で、収容村民の数は350万に達し、愛路少年隊4315隊、隊員数は実に51823名に達している。[32]

上記の愛路少年隊は1935年、愛路運動の中核を担う集団として結成され、家業の余暇に規律ある軍隊的な訓練をうけ、鉄道警備の基礎能力を体得すると共に公民教育、日本語講習、農畜産知識の教育、試作圃経営指導などをうけることになった。これは「満洲国青少年運動」の先駆である。1939年３月１日、満洲国協和青少年組織大綱による協和青少年団の全国一律化にともない、愛路少年隊も進んでその傘下

に合流し、鉄道愛護団協和青年団並同少年団として改編合流した事実を踏まえれば、景順、相文兄弟という人物像を作り出した大庭は次世代という「中堅層」の育成をも期待していたと言えるであろう。

「満洲国」成立後、大庭武年はいわゆる「建国運動」に参加しながらも失敗した。挫折後の1934年、大庭は満鉄に入社した。大庭は「満洲国」の宣伝活動に従事しながら、『満蒙』、『協和』などの満洲で刊行された雑誌の中で時局に応じた戯曲や小説などを発表し始めた。これらの作品に対して、西原は次のように指摘している。

> 「凱歌あがる下に」「烽火」「劉愛護村長」「農民」などといった小説や戯曲などは、いずれも満洲の時局に材を得たもので、彼の筆達者は相変わらず、一通りは読ませる力を持ってはいるのだが、そのテーマといえば要するに、新国家の歴史的意義や、その理想をただ能天気にうたいあげるといったおもむきで、つまりはプロパガンダ文学以外の何ものでもない。[33]

西原が指摘したように、「満洲国」成立後に大庭が創作した戯曲や小説はプロパガンダ文学である。大庭の戯曲創作を通時的に見てみると、創作期には変化が見てとれる。満鉄入社前の「張学良」のような戯曲は国策宣伝の一面が弱く、大庭自身の創作意思が強く感じられ、大庭なりの思想が組み込まれていると思われる。しかし、満鉄入社後に創作された「劉愛護村長」は完全に国策宣伝のために創作されたものと考えられ、大庭自身の戯曲創作の特色が失われたように感じられる。この変化は、おそらく大庭の満鉄入社と関わっている。

大庭武年は鉄路総局愛路課に勤めている間に、戯曲「劉愛護村長」を創作しただけではなく、『護れ愛路旗：愛路文藝集』(1939.3)、『鐵道愛護運動の概要』(1939.9)、『愛路美談集』(1939.10) などの、鉄道総局愛路課によって発行された書籍の編集にも積極的に参加していた。つまり、満鉄入社後の大庭は満鉄という「公」の領域に束縛され、戯曲創作も満鉄からの影響を強く受けていた。この創作背景の変化から大庭武年が最終的に完全な国策宣伝者になった要因を見出せるのではないかと思われる。

五、結論

大庭武年の文学創作時期は探偵創作を加え、概ね1930年から1937年にかけての八年間である。その間に、「満洲国」の建国をきっかけにして大庭は建国運動に加わり、雑誌『満蒙』を拠点にして戯曲を創作した。「張学良」から「劉愛護村長」まで、大庭武年が戯曲を創作した時期によって、大庭自身の志向にも変化が見られる。満鉄入社以前は、国策宣伝の一面はあるものの、ある程度隠されており、「通俗歴史叙述者」たる個人の志向がみられる。1934年の満鉄入社後には、鉄道保護を宣伝する戯曲「劉愛護村長」が発表され、明確な国策宣伝者としての姿が現われた。

大庭は戯曲において創作力を発揮し、満鉄入社前の大部分の戯曲では大庭自身の「満洲国」経験と歴史修養を活用し、歴史・政治・人物に重心を置く手法を作り出したのである。満鉄入社の1934年までに創作した戯曲のほとんどは「満洲国」の建国を宣伝する意図はみられるものの、全面には展開されていない。むしろ、大庭自身が通俗歴史叙述家としてより外に自分を生かそうとは考えていないと述べているように、歴史、政治に対する個人的な考えが展開されている。しかし、満鉄に入社した後に創作した「劉愛護村長」は完全な国策宣伝そのものであった。大庭武年は探偵小説家から、戯曲作家、そして最終的には完全な国策宣伝者へと変身を遂げたのである。そうである以上、大庭武年が「満洲国」戯曲作家として位置づけられるのは不可避であるといえるだろう。

注

1　群家陸夫、時評「寂寥たる満洲文芸界」、『満蒙』第143号、満洲文化協会、1932.3、p.128。
2　注１に同じ、p.128。
3　西原和海、大庭武年、『朱夏』(13)（特集・探偵小説のアジア体験）、せらび書房、1999。
4　細川涼一、大庭武年雑記 ── 旧満洲大連の探偵作家、『京都橘大学研究紀要』(33)、2006。
5　横井司、解題、『大庭武年探偵小説選Ⅰ』（大庭武年著　論創ミステリ叢書）、論創社、2006.12～2007.1、pp.256－257。
6　注４に同じ、p.40。
7　注５に同じ。
8　郷警部シリーズの作品は「十三号室の殺人」、「競馬会前夜」、「ポプラ荘の事件」、「牧師服の男」、「海浜荘の惨劇」という五作を指す。

9　注３に同じ、p.52。
10　柴紅梅、大庭武年偵探小説与大連之関連 ── 以『小盗児市場殺人』為例【中国語】、『学術交流』（第195期）、2010.6、p.186（引用は筆者訳である）。
11　大庭武年、「蔣介石」、『満蒙』第169号、満洲文化協会、1934.5、p.170。
12　注５に同じ、p.258。
13　岡部牧夫、『満洲国』（講談社学術文庫、2007年）、満洲国史編纂刊行会編『満洲国史 各論』（満蒙同胞援護会、1971年）、59－73頁。
14　大庭武年、「張学良」、『満蒙』第145号、満蒙文化協会、1932.5、ｐ.147。
15　大庭武年、「張学良」、『満蒙』第144号、満蒙文化協会、1932.4、ｐp.159－160。
16　「蔣介石」は雑誌『満蒙』の第169号に掲載され、1924年に蔣介石が校長として黄埔軍校を創設することを背景に創作された三幕劇である。この戯曲では、蔣介石は新軍閥の独裁者として描かれている。戯曲には大庭武年の蔣介石に対する嫌悪感が読み取れる。
17　注14に同じ、pp.146－147。
18　大庭武年、「馬占山」、『満蒙』第159号、満洲文化協会、1933.7、p.213。
19　注18に同じ、p.212。
20　立花丈平、『馬占山将軍伝：東洋のナポレオン』、徳間書店、1990.11。
21　北洋派：元々は、清朝末期に李鴻章が結成した地方軍・淮軍が主体となっている。1901年、袁世凱は清朝の北洋通商大臣に就任し、西洋式の新しい北洋軍を設立、北洋軍は年々拡大し、北洋だけではなく中央や各地方にも鎮守することになった。1911年から1912年にかけて起こった辛亥革命により、袁世凱は革命軍に協力して、清朝を打倒し、中華民国の樹立に協力した。
22　大庭武年、「清朝終焉」、『満蒙』第158号、満洲文化協会、1933.6、p.217。
23　大庭武年、「満洲開基」、『満蒙』第167号、満洲文化協会、1934.3、p.236。
24　注22に同じ、p.217。
25　注23に同じ、ｐ.251。
26　王桂妹 何爽、偽満洲国時代的協和劇、『武漢大学学報』（人文科学版）第66巻第５期、2013.9.　ｐ.120。
27　何爽、偽満洲国戯劇中的植民地現代性景観、『吉林広播電視大学学報』第159期、2015.3、p.89。
28　『鉄道愛護運動の概要』、鉄道総局附業局愛路課編、1939.9、p.1。
29　注28に同じ、p.1。
30　大庭武年、「劉愛護村長」、『満蒙』第177号、満洲文化協会、1935.1、p.229。
31　注28に同じ、p.5。
32　孫 佳茹、「日本占領下における満洲国愛路少年隊の役割 ── 愛路少年隊訪日団をめぐっ

て」、『早稲田大学教育学会紀要』(12)、2011.3、p.129。

33　注 3 、p.52。

（おう・せんいち／文学研究科）